

フィリピンの保育者による 4～6 歳児の「社会情動的スキル」と 「レジリエンス」の理解と促進

テルマ・ミンゴア¹、クリスティン・ヘルナンデス¹、ドミニク・パギオ¹、アビゲイル・ライス¹、

マリア・リタ・タパレス¹

¹ デ・ラ・サール大学(フィリピンマニラ)

要旨

このケーススタディは、フィリピンにおいて、幼児教育・保育(ECEC)の現場にいる保育者が 4～6 歳児の社会情動的スキルおよびレジリエンスについてどのように理解し、促進しているかを調査するものである。フィリピンは自然災害に遭いやすく、こうした困難、特に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックなどの困難に立ち向かう上で、レジリエンスは重要である。本調査はパンデミック後の 2023 年から 2024 年にかけて行われたものである。しかし、レジリエンスは成長とともに発達するため、これを育むための認識と実践はパンデミック後もなお有意義である。本調査では、保育者たちのレジリエンス育成に対する認識とアプローチを調査した。まず予備調査として、園の管理職や主任保育者とフォーカスグループ・ディスカッションを行い、レジリエンスという用語に対する彼らの理解度を確認し、次いで自園の保育者たちにこの用語を提示する際の提案を聞いた。さらに、主調査としてケーススタディ・インタビューを行った結果、保育者たちの「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という用語に対する理解度にはばらつきがあり、包括的な理解の必要性が明らかになった。保育者たちは、子どもの発達における社会情動的スキルの重要性を認識しており、これらを感情制御、社会的インタラクション、人間関係の構築と関連付けている。レジリエンスに関しては、保育者たちは、困難な状況から学び、適応力と勇気を発揮する能力であると認識していた。またこの調査では、レジリエンスの育成を目的とした教育プログラムや教材、さらには修復的対話、ピースサークル(peace circle)、ピースコーナー(peace corner)など、保育者たちが子どものレジリエンスを育成するために行っている活動や実践についても調査した。総じて、この調査の結果は、子どものホリスティックな発達とウェルビーイングを支援するために幼児教育においてレジリエンスと社会情動的スキルを育成することの重要性を強調するものとなった。また、複数のケーススタディを分析した結果、異なる園に勤めるさまざまな年齢の保育者たちが異なる認識をもっていることが明らかになった。

キーワード: レジリエンス、幼児教育の保育者、社会情動的スキル、ピースサークル

はじめに

フィリピンは頻繁な暴風雨や環境的な問題に由来する地理的脆弱性を抱えていることから、国民のレジリエンスは貧困、家族のサポート、地域の結束などの要因によって育まれてきた (Bankoff, 2007)。レジリエンスは子どもの発達にとっても極めて重要であり、コロナ禍においてその重要性がさらに高まり、レジリエンススキルの早期育成の必要性が浮き彫りとなった (Ungar 2008, Cusinato 他 2020, Cohn 他 2009)。

レジリエンスを促進するための教育カリキュラムは存在するが、これを効果的に実施するには、教育者の包括的な理解が必要不可欠である (Las Hayas 他 2019, Pinto 他 2021, Fenwick-Smith 他 2018)。MATATAG カリキュラムは、元来、フィリピンの価値観と愛国心を根付かせることを目的としていたが、次第にパンデミックを含むさまざまな困難を乗り越えるためのレジリエンスが含まれるようになった (Zara 他, 2022)。フィリピンの「2030 年に向けた基礎教育開発計画」では、世界的に通用する競争力と高いレジリエンスを備えた若者を育成する変容的教育に重点を置いている (教育省, 2024)。MATATAG はフィリピン語で「レジリエンス」を意味する言葉であるが、新しいカリキュラムの 4 つの柱を示す頭字語でもある。

MAke the curriculum relevant to produce competent and job-ready, active, and responsible citizens (有能で即戦力となる人材で、積極的かつ責任感がある市民を育成するカリキュラムを作る)

TAke steps to accelerate delivery of basic education facilities and services (基礎教育施設とサービスの提供を加速化する対策を講じる)

TAke good care of learners by promoting learner well-being, inclusive education, and a positive learning environment (学習者のウェルビーイング、インクルーシブ教育、肯定的な学習環境を促進することにより、学習者を大切に扱う)

GIve support to teachers to teach better (教師がより良い指導を行えるようサポートする)

この調査で最も重点を置いているのは、3 番目の柱である「学習者のウェルビーイング・・・を促進することにより、学習者を大切に扱う」ことである。社会情動的スキルとレジリエンスを育むための戦略は、主に価値教育の科目に含まれている。ただし、クリティカルシンキング、意思決定、問題の処理能力、創造力、柔軟性のスキルは、同カリキュラムの他の科目に組み込まれている。

さらに、自然災害の影響を受けるフィリピンの文化的背景はレジリエンスと適応力のメカニズムを形成しており、それは「**Bahala na**」(神の御心のままに)や「**Bayanihan**」(助け合い)などの地域支援体制に顕著となっている (Songcayaon 他, 2020)。先行研究では、レジリエンスと学業的成功の促進における「社会性と情動の学習」(SEL)の重要性が指摘されており、支援的な学校環境の必要性が浮き彫りになっている (Cavioni 他 2020, Rungduin & Reyes 2016)。

さらに、感情的知性とレジリエンスの関係は、自己啓発や適応的な対処戦略の重要性を強調している(Sotto 他、2022)。タイとフィリピンでコロナ禍中に行われた教育現場における教師のレジリエンスに関する研究では、適応力と協調性が重要な要因であることが指摘されている(Zara 他、2022)。また、逆境に直面した時の重要な適応メカニズムとして**宗教、精神性、地域の支援**が強調されている(Rungduin & Reyes、2016)。

フィリピンは独特の地理的、文化的背景をもち、頻繁な暴風雨や貧困などの困難がある中で、国民のレジリエンスが育まれている。子どもの発達におけるレジリエンスは、ホリスティックなウェルビーイングの育成を目指すフィリピンの教育政策とカリキュラムで特に重要視されている。先行研究では、学校での「レジリエンス」の育成と「社会性と情動の学習(SEL)」の促進における感情的知性の役割が指摘されている。さらに、フィリピンでは、学習者のレジリエンスを育むために、支援的環境の構築と地域支援の活用に優先的な重点を置いている。

方法論

本研究では、4～6 歳児のレジリエンスと社会情動的スキルを育む保育者の経験を調査することを目的に、混合手法アプローチを採用し、インタビューによる予備調査と主調査を行った。予備調査は園の管理職を対象に行い、主調査のインタビュー質問を作成するためのデータを収集した。

予備調査: 予備調査は 2023 年 9～10 月に実施した。表 1 に示されているように、予備調査では園の管理職 8 名とフォーカスグループディスカッション(FGD)を行った。全員が女性で、大半が私立園(87.5%)に勤めており、残りが公立園(12.5%)であった。71.4%が 15 年超の保育経験があり、62.5%が 15 年以上の管理職経験があった。

表 1. 園管理職の保育従事歴

保育従事者として	園の管理職として	経験年数
0.0	25.0%	5 年未満
14.3%	0.0	5 年以上 10 年未満
14.3%	12.5%	10 年以上 15 年未満
71.4%	62.5%	15 年以上

主調査: 予備調査の後、2024 年 1～2 月に主調査を実施した。主調査ではケーススタディ法を採用し、様々な園の女性保育者 15 名にインタビューを行った。うち 66.7%が私立園、33.3%が公立園に勤めていた。表 2 は保育者の保育歴を示したもので、26.7%が 5 年未満、20%が 15 年以上の経験を有していた。データ分析には主題分析を用いている。

表 2. 保育者の経歴

保育従事者として	経験年数
26.6%	5 年未満
26.7%	5 年以上 10 年未満
26.7%	10 年以上 15 年未満
19.9%	15 年以上

結果

調査の結果、(1) 保育者の「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という用語の理解、および(2) 4～6 歳児におけるこれらスキルの促進や発達が明らかになった。

1. 保育者は「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という用語をどのように理解しているか

予備調査(ECEC 施設の管理職／主任保育者とのフォーカスグループインタビュー)

幼児教育・保育施設の管理職や主任保育者の「社会情動的スキル」と「レジリエンス」に対する認識を調査した結果、彼らがこうした概念を包括的に理解していることが明らかになった。

「社会情動的スキル」については、調査参加者たちは、自己認識、帰属意識、感情認識および表現という側面において子どもの発達にとって重要であることを理解していた。また、感情や行動を制御する上での自己抑制の重要性も認識していた。予備調査から得たテーマは、社会情動的スキルの認識と育成のさまざまな側面に焦点を当て、年齢に応じた介入と、環境や親の学業重視が与える影響を強調するものとなっている。

収集したデータの初期コードに基づき、「社会情動的スキル」に関する次のテーマが明らかになった。

テーマ 1:社会情動的スキルの定義と構成要素:「感情制御」、「自己認識」、「帰属意識」、「感情表現」、「意思決定」

テーマ 2:社会情動的スキルが高い子どもの資質:「幸福である」、「安全である」、「つながりのある」、「リラックスした」、「自信がある」、「他者と上手くかかわれる」

テーマ 3:社会情動的スキルを育む重要性:「全体的な発達とウェルビーイングに必要不可欠」

テーマ 4:育むべき特定の社会情動的スキル:「友人関係の構築」、「感情制御」、「自己認識」、「意思決定」、「境界設定」、「実行機能」

「レジリエンス」に関しては、調査参加者たちは子どもの情動的な柔軟性と新しい経験に適応する能力であると理解しており、粘り強さと内面の強さに重点を置いたレジリエンス・トレーニングをカリキュラムに組み込んでいた。管理職は、「Grit(やり抜く力)」などの概念と同様に、子どもが困難に対処し、乗り越えるためにはレジリエンスが不可欠であると考えている。インタビューから得たテーマは、特にコロナ禍のような逆境に直面した場合など、教育現場におけるレジリエンスの理解、発達、文脈付けを強調するものとなっている。

収集したデータの初期コードに基づき、「レジリエンス」に関する次のテーマが明らかになった。

テーマ 1:レジリエンスの定義と構成要素:「新しい経験への適応」、「感情の柔軟性」、「対処能力」、「粘り強さ」、「決意」、「性格の強さ」

テーマ 2:レジリエンスの発達と促進:「失敗から学ぶ」、「変化に適応する」、「感情制御力の育成」

テーマ 3:教育現場におけるレジリエンスの文脈付け:「特定の文化的背景に関連した教育実践へのレジリエンス・トレーニングの統合と理解」および「保育者研修プログラムへの組み入れ」

管理職は、保育者たちが社会情動的スキルとレジリエンスに関する研修を受けており、これらのスキルを育む活動や実践を行っている」と指摘している。人によって異なる学歴ゆえ、レジリエンスや社会情動的スキルに対する認識にバラツキがあるため、取り組みを導入する前には共通の理解をもつことが必要となる。彼らの園の教育プログラムや教材は、価値観の形成、チーム力の育成、感情認識の促進に重点を置き、支援的な園のコミュニティ内で保育者と園児の両方がレジリエンスを養うことを目指している。

主調査(保育者とのケーススタディインタビュー)

保育者とのインタビューの結果、社会情動的スキルとレジリエンスの理解と重要性、4～6 歳児の学習ソースと困難、レジリエンスを育むための効果的な適応とアプローチ、インクルーシブな

実践と保護者とのコミュニケーション、保育者としての子どもとのかかわりと保護者へのフィードバックが明らかになった。

「社会情動的スキル」という言葉に対する保育者の認識:社会情動的スキルに関するインタビューから得た主なテーマは、(1)社会情動的スキルの定義と構成要素、(2)社会情動的スキルが高い子どもの資質、(3)社会情動的スキルを育む重要性、(4)育むべき特定の社会情動的スキル、(5)社会情動的スキルの育成であった。

テーマ 1: 社会情動的スキルの定義と構成要素: 保育者たちは社会情動的スキルの重要性を認識しており、感情制御や他者とのかかわりにおける社会情動的スキルの役割を指摘している。彼らは、これらのスキルを「人間関係の構築」、「感情や行動の制御」、「相手の立場に立って考える」(ケース 2、4)、「他者との対立を上手く処理する」(ケース 6)などの能力を包括するものと定義している。

テーマ 2: 社会情動的スキルが高い子どもの資質: 保育者たちは、社会情動的スキルが高い子どもの資質として、「幸福である」、「安全である」、「つながりがある」、「リラックスした」、「自信がある」、「他者と上手くかかわれる」ことを挙げている。つまり、こうした子どもは社会的な場面においてレジリエンス、適応力、共感力、自信を発揮する優れたコミュニケーションターと言える。ケース 1 の回答者は、社会情動的スキルが高い子どもを「自分の気持ちを表現できる」、「なぜ自分が特定の感情を抱くのか理解し、反応し、他者と(言語的または非言語的に)コミュニケーションをとることができる」と述べている。

テーマ 3: 社会情動的スキルを育む重要性: ここでは、子どもの社会情動的スキルを育むことの重要性に重点が置かれ、社会情動的スキルが子どもの総合的な発達とウェルビーイングにとって重要な役割を果たすことを強調している。

テーマ 4: 育むべき特定の社会情動的スキル: このテーマでは、「友人関係の構築」(ケース 2、7、8)、「感情制御」(ケース 6、12)、「自己認識」(ケース 14)、「意思決定」、「境界設定」、「実行機能」など、子どもにとって育むべき重要な社会情動的スキルを取り上げている。

テーマ 5: 社会情動的スキルの育成: このテーマには、「人間関係の構築」、「失敗の対処」、「保育者への信頼」または「園環境への信頼」、「感情制御」、「共有」、「順番を守る」、「他者への思いやり」、「考え方を理解する」、「社交性」、「自信」、「共感力」、「友好性」など、インタビューから得た初期コードが含まれている。

「レジリエンス」という言葉に対する保育者の認識:「レジリエンス」に関するインタビューから得た主なテーマは、(1)レジリエンスの定義と理解、(2)レジリエンスが高い子どもの資質、(3)レジリエンスを育む重要性であった。

テーマ 1: レジリエンスの定義と理解: 保育者たちは、レジリエンスを「逆境から立ち直り、困難な状況に適応する力」と理解していた。彼らは、レジリエンスが子どもにとって非常に重要であると指摘し、レジリエンスを「困難から学ぶ」、「前向きな姿勢を保つ」、「タスクに粘り強く取り組む」、「必要に応じて助けを求める」力であると説明している。

テーマ 2: レジリエンスが高い子どもの資質: レジリエンスが高い子どもは「たくましさ」、「柔軟性」、「適応力」、「強さ」をもち、「人生に対して前向きで勇敢」、「困難に勇敢に立ち向かう」、「感情を処理する」、「経験を振り返る」、「自信をもって他者とのかかわれる」力があると考えられていた。保育者の1人は、レジリエンスを「周囲で起こる様々な状況に合わせて柔軟にしなる竹」のようなものだと説明している(ケース 3)。別の保育者は粘り強さを強調し、「例えば、積み木で遊んでいる時に、いくら崩れ落ちても、何度も何度も積み上げようと挑戦する力」であると述べていた。

テーマ 3: レジリエンスを育む重要性: 保育者たちは皆、子どものレジリエンスを育むことが非常に重要であると確信していた。「幼い頃からレジリエンスを育むことで、将来困難な状況に直面しても対処する力を養うことができる」(ケース 4)。

保育者はどこで「社会情動的スキル」や「レジリエンス」について学んだのか

保育者たちは、学士課程、作業療法、セミナー、読書、私生活での出会いなど、様々な教育経験を通じて社会情動的スキルとレジリエンスに関する知識を得ていた。彼らは、学術的および実践的な現場におけるこれらの概念の重要性を強調し、正規の教育、プロフェッショナルとしての経験、および個人的な観察によって理解を深めることができると述べている。

保育者が考える 4～6 歳児にとっての困難や逆境

保育者たちは、分離不安、感情表現の難しさ、家庭環境と園環境のギャップ、社会的インタラクションの制限などを、4～6 歳児にとっての困難として述べている。ケース 11 の回答者は、家庭環境と園環境にギャップがあり、「家庭ではルールが少ないため、園でのルーティンに従うことが困難になっている」と指摘している。こうした困難は、子どものホリスティックな発達を支援する上で感情的要因と環境的要因に対処する重要性を浮き彫りにしている。

保育者が考える 4～6 歳児にとっての「うまく適応する」「立ち直る」とは

保育者たちは、子どもがうまく適応し、立ち直るということは、困難にもかかわらず粘り強く学び続ける力、必要なときに助けを求める力、自信をもって他者とのかかわる力、そして人生に対して前向きな姿勢を保つ力であると説明している。ケース1の回答者は、「どんな間違いや失敗を犯しても、新しいことを学んだり、スキルを伸ばしたり、新しい経験に挑戦したりすることをやめない」子どもはレジリエンスが高いと述べている。保育者たちは、子どものレジリエンスと適応力を育む上で、サポートする両親、保護者、保育者の役割を指摘している。

2. 保育者はどのように 4～6 歳児の社会情動的スキルとレジリエンスを促進／育成しているか

保育者たちが子どものレジリエンスを育むために行っている活動、実践、かかわり

この調査の保育者たちは、4～6 歳児の社会情動的スキルとレジリエンスを促進するための様々な活動、実践、かかわり、プログラムを提示している。表 3 は、保育者たちが子どものレジリエンスを育むために行っている活動、実践、かかわりをまとめたものである。

表 3: 保育者たちが子どものレジリエンスを育むために行っている活動、実践、かかわり

修復的対話
ピースサークル (peace circle)
ピースコーナー (peace corner)
感情が大きく動くような状況について話す (みんなで話す)
感情を受け入れる
表現することを促す
相手の立場に立って考える
クラスメートと解決する
サークルタイム、遊びの時間、読み聞かせの時間にレジリエンスの学びを組み入れる
困難な状況で励ましを与える
クラスメートとのかかわりを促し、社交スキルを養う実践的な活動

これらのアプローチは、子どもの感情制御、コミュニケーション、共感力、問題解決スキルを育成することを目的としている。

子どもに人生の大切な教訓を教え、レジリエンスを育むために、園で行われている教育プログラムと教材

私立幼稚園の保育者 2 名は、社会情動的スキルとレジリエンスを養うための外国のプログラムで研修を受けていた。これはコロナ禍以前から同園が取り入れてきた「平和教育」の一環である。別の園の保育者たちは、コロナ禍の後に地元の研修に参加したり、独学で勉強したりしていた。表 4 はこうした実践をまとめたものである。

表 4:子どもに人生の大切な教訓を教え、レジリエンスを育むために、
園で実施されている教育プログラムと教材

平和教育: ピースサークル、ピースコーナー
修復的対話
読み聞かせ
目標の評価
視覚化演習
社会的・情動的・倫理的知性の学び(SEEL)

平和教育には、「(1)ピースサークルやピースコーナーのような安全な空間の創出、(2)喧嘩を解決するための修復的対話、読み聞かせ、社会的スキルに焦点を当てた評価目標、視覚化演習、および子どもの社会情動的ニーズに対処するための総合的なアプローチ」が含まれている。ケース 2 の回答者は、「**ピースコーナー**が子どもにとって気持ちを落ち着かせ、自分の感情を認識し、自分に影響を与える状況に対処する準備がしやすい安全な場所である」と説明している。「ピースコーナーは、子どもの気持ちが大きく揺れ動いた時、1)落ち着いて自分の感情について話せるようにし、2)子どもの感情を大きく動かした社会的状況について話し、3)子どもがどのように感じているかを受け入れ、4)子どもが置かれている状況で何をすべきかを話し合い、5)相手の立場に立って考え、6)クラスメートと一緒に解決策を見つける助けとなります」と述べている。さらに、**修復的対話**は「子どもと一緒に状況に対処し、子どもが正しい解決策を見つけられるようにする方法である」とも説明している。「修復的対話はマーガレット・ソーズボーンの著書からインスピレーションを得たもので、喧嘩をした子どもたちに一連の質問を行い、喧嘩の原因となった意見の対立を解決する手助けをする方法を論じている」。

またケース 1 の回答者は、**社会情動的・倫理的知性の学び(SEEL)**についても言及している。これは海外から取り入れたプログラムであり、平和教育のカリキュラムに貢献するもので、自分自身や他者を社会情動的により良く理解し、より平和的に社会的関係を築くことを目的としている。SEEL はエモリー大学の特定の SEEL プログラムに準拠しており、ケース 1 とケース 2 の回答者の所属は、社会情動的・倫理的知性の学びのファシリテーション証明書を取得したフィリピン初の園となっている。SEEL 活動は週に 1 回行われる平和教育クラスで実施されるが、SEEL の実践は朝のミーティングから一日の終わりまで、すべての科目において組み込まれている。この平和教育はパンデミック以前から園で導入されていた。

シナリオ設定:

保育者とのインタビューには、シナリオ設定を提示し、保育者がシナリオの状況下で子どもとどのように接するかを答えてもらうことも含まれており、保育者が社会情動的スキルやレジリエンス

という用語の定義を明確に理解しているかどうか、様々な状況で社会情動的スキルやレジリエンスをどのように促進するかなどを調査した。

シナリオ 1: 友だちから仲間外れにされた(仲間に入れてもらえなかった)

これは、子どもが仲間外れになった場合、クラスの包括性を促進し、仲間外れに対処する戦略に関するものである。保育者たちは、自主性を尊重すること(ケース 1)、仲間外れになった子どもを注意深く仲間に入れること、ソーシャルストーリーを通じてクラスの問題に対処すること(ケース 2)を指摘している。彼らは様々なケースの中で、励ましたり、才能を発見したり、子ども同士を紹介したり、解決策を探求するなどのアプローチを挙げている。

シナリオ 2: 友達と喧嘩した

これは、子ども同士の対立を解決するための仲介プロセスを説明するものである。仲介する保育者は喧嘩した双方の子どもの話を聞き、共感を促し、結果を理解できるよう手助けする。目標は平和的な解決である。双方の子どもの話を確認し、謝罪を促し、前向きな行動を強化し、コミュニケーション、共感、理解に重点を置く。

シナリオ 3: 親しい周囲の人(大好きな先生や仲良しの友達など)が引っ越していなくなってしまう

これは、大切な人との別離を乗り越える子どもをサポートする戦略について説明するものである。大きな変化に直面した子どもに、感情の表現を促す、説明する、新しい友情を勧める、コミュニケーションを促進する、信頼関係を築く、慰める、安心感を与え続けるなどのアプローチが挙げられた。

シナリオ 4: 家庭内で辛いことがあった(親に叱られた、親同士の喧嘩など)

ここでは、家庭で起こった動揺する出来事に対処し、子どもの気持ちを理解し、根本的な原因を調べ、サポートと指導を提供することを重視している。このアプローチには、子どもの気持ちを落ち着かせるために、感じていることを尋ね、経験を共有し、解決策について話し合い、オープンなコミュニケーション、安心感、共感を促進することが含まれる。

考察

「MATATAG」の概念は、元来の国家主義的な文脈を超えて、様々な困難に対するレジリエンスを包含するまでに進化しており、風にしなる竹のように柔軟な適応力を重視している。レジリエンスは幼児期から極めて重要なものであり、愛、寛容、粘り強さなど、逆境に立ち向かうために必要な資質を育む。フィリピンは毎年、暴風雨に見舞われる国であり、こうした逆境で国民のレジリエンスが長年育まれてきたが、コロナ禍では早急の適応が必要となり、新たな状況でのレジリエンスが試されることになった。レジリエンスは学習可能なスキルとして認識されており、このことは困難な時期に子どもたちを導きサポートするために迅速に適応した保育者によって実証されている。また、コロナ禍によってオンライン教育への急速な移行が必要となり、世界中の教育システムは大きな困難に直面することになった。

しかし、保育者たちは逆境の中でも機能性を維持し、レジリエンスを発揮した。教育現場におけるレジリエンスは、人、テクノロジー、プロセスを含め、特に保育者のレジリエンスが重視される。優れたリーダーシップやコミュニティの構築などの要素は、内面のレジリエンス、対人的なレジリエンス、外的なレジリエンスを反映し、困難な状況の中で極めて重要であるとみなされている。

予備調査の結果、幼児教育・保育施設の管理職や主任保育者たちは社会情動的スキルとレジリエンスについて包括的に理解していることが明らかになった。彼らは、子どもの発達におけるこれらのスキルの重要性を認識しており、年齢に応じた介入を重視している。

主調査の結果は予備調査の所見を裏付けており、感情制御、人間関係の構築、困難への適応における社会情動的スキルとレジリエンスの役割が強調されている。保育者たちはこれらの概念に関する知識をさまざまな教育経験から得ており、教育現場における理解とアプローチの基盤となっている。

分離不安や社会的インタラクションの制限など、4～6歳児が直面する困難は、感情的要因と環境的要因に対処することの重要性を強調するものであった。子どもがうまく適応するためには、両親、保護者、保育者のサポートを受けながら、粘り強く、前向きな姿勢を保ち、必要とあれば助けを求めるスキルをもつことが必要になる。保育者たちは、感情制御、コミュニケーション、共感力、問題解決スキルの育成を目的とした活動と実践を行っていた。

社会性と情動の学習(SEL)とレジリエンスの間には、特にフィリピンの文化と教育実践の文脈においては、複雑な相互作用が存在する。保育者にとって、レジリエンスは(よく話題になるため説明しやすいものの)社会性と情動の学習と深く絡み合っているものである。公立幼稚園の保育者たちは、レジリエンスを園環境の内外における適応であると認識しており、社会的支援と積極的な育成が重要な役割を果たすことを指摘している。保育者たちは園児を効果的にサポートするための戦略を研修で習得しているが、科学的根拠に基づいたアプローチではなく、実践的なアプローチに依拠している保育者もいた。

特に、社会性と情動の学習は、感情のコントロールなどの目に見える要素だけでなく、コミュニケーションや信頼などの目に見えない側面にも及ぶ。私立園の保育者たちは社会情動的スキルについて明確な概念をもっているようだが、いずれのグループもレジリエンスは文化的に根付いた適応能力であり、困難に直面することで時間の経過とともに発達する能力であると認識している。

しかし、社会性と情動の学習の実践は、特に自己管理や対立の解決において、構造化されたツールや研修を提供することにより常識的なアプローチを超えて強化する必要がある。最終的には、社会性と情動の学習は、急速に変化する世界を切り抜け、個人および社会の目標を達成するために必要不可欠なレジリエンスを育むための基礎的なリソースとなる。

本研究は、適応力、コミュニケーション、支援ネットワークを重視しつつ、コロナ禍における教育現場のレジリエンスについて貴重な洞察を示すものである。実用的な意義として、教育者のための継続的な専門能力開発と効果的なコミュニケーション戦略が挙げられる。総じて、本研究

は教育現場のレジリエンスに関する研究文献に貢献し、危機的状況における関連性を明らかにし、政策立案者、教育者、研究者に示唆を与えるものである。

References

- Bankoff, Gregory (2007). Living with Risk; Coping with Disasters: Hazard as a Frequent Life Experience in the Philippines. *Education About Asia*, 12(2), 26-29.
- Cavioni, V., Grazzani, I., & Ornaghi, V. (2020). Mental health promotion in schools: A comprehensive theoretical framework. *International Journal of Emotional Education*, 12(1), 65-82. Retrieved from www.um.edu.mt/ijee.
- Cohn, M. A., et al. (2009). Happiness unpacked: Positive emotions increase life satisfaction by building resilience. *Emotion*, 9(3), 361.
- Cusinato, M., et al. (2020). Stress, resilience, and well-being in Italian children and their parents during the COVID-19 pandemic. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17(22), 8297.
- Department of Education. (2024). MATATAG Curriculum. <https://www.deped.gov.ph/matatag-curriculum/>
- Fenwick-Smith, A., et al. (2018). A systematic review of resilience-enhancing, universal, primary school-based mental health promotion programs. *BMC Psychology*, 6(1), 30.
- Las Hayas, C., et al. (2019). UPRIGHT, a resilience-based intervention to promote mental well-being in schools: Study rationale and methodology for a European randomized controlled trial. *BMC Public Health*, 19(1), 1413.
- Pinto, T. M., et al. (2021). Resilience program for children and adolescents: A systematic review and meta-analysis. *Frontiers in Psychology*, 12, 754115.
- Rungduin, T. T., & Reyes, Z. Q. (2016). The Filipino learner: A socioemotional perspective. *International Journal of Research Studies in Education*, 5(4), 3–17.
- Songcayaon, V., Legarde, M. A., & Jungco, J. (2020). Children of the Flood: The Effect of Flood on the Psychological Resilience of Children. *Asian Journal of Resilience*, 2(1), 1-10.
- Soto, C. J., Napolitano, C. M., Sewell, M. N., Yoon, H. J., & Roberts, B. W. (2022). An integrative framework for conceptualizing and assessing social, emotional, and behavioral skills: The BESSI. *Journal of Personality and Social Psychology*, 123, 192-222.

The MATATAG Curriculum. Bureau of Curriculum Development. Department of Education. Philippines. Retrieved May 29, 2024 from [the MATATAG CURRICULUM GENERAL-SHAPING-PAPER-2023.pdf](#)

Ungar, M. (2008). Resilience across cultures. *British Journal of Social Work*, 38(2), 218–235. <https://doi.org/10.1093/bjsw/bcl343>

Zara CG, Balazon F, Wangdi T, Perales WF, Praditson P, & Ulla MB (2022). Exploring the concept of pedagogical resilience during the COVID-19 pandemic: Teachers' perspectives from Thailand and the Philippines. *Front. Educ.*, 7, 981217. doi: 10.3389/educ.2022.981217